

2. 「黒い雨」の指導について

齊藤真子

【抄録】文学教材として「黒い雨」を年間計画の中でどのように位置づけ指導したかということと、平和教育の一環として学校行事との関わりを持たせながら国語科でどのように指導したかについての実践報告である。

【キーワード】「黒い雨」 平和教育 学校行事

1 はじめに

本学国語科では、高校一年で井伏鱒二「黒い雨」高校二年で夏目漱石「こころ」高校三年で森鷗外「舞姫」を各学年ごとの文学教材の核（必ず取り上げるもの）的作品として位置づけ、「黒い雨」と「こころ」は文庫本で全編を読ませることが多い。90年度までの使用教科書である筑摩書房の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」「現代文」にそれらが採択されているからであるが、89年度まで、高校二年生は「研究旅行」で、広島（長崎）の原爆資料館を見学したり講演を聞いたりして平和学習をしてきている。それへのつながりとして、高校一年生で井伏鱒二「黒い雨」を指導してきたからでもある。

本校は学校改革に取り組み90年度から「国際化と平和の教育」を教育目標としている。さて、90年度の高校は「沖縄研究旅行」を実施し、「糸数壕」（アブチラガマ）で平和セレモニーを行い、戦跡や基地を回り平和学習をした。旅行地が「広島」（長崎）から沖縄にかわったが、高校一年で井伏鱒二「黒い雨」を読み、平和学習を国語科とする意味は変わらないので、90年度の高校一年生においても、長編小説として「黒い雨」を取り上げ指導した。

また、86年度の高校一年生（高二で広島の平和学習）においても、同じように長編小説として「黒い雨」を取り上げ指導したので、90年度の高校一年生と比較してみた。

2 「黒い雨」の指導のあらまし

(1)指導計画

高校1年

7月 テスト明け

新潮文庫「黒い雨」全員講入
井伏鱒二について説明（1時間）

8月 夏休み

「黒い雨」を読む
「黒い雨」を夏休み読書感想文（400字5枚

以内）で書いて提出してもよい

〔86年度は全員400字2枚の感想を書く〕

9月 「黒い雨」の感想文提出者 約1/3

1限目 感想文を紹介しながら、20章の分担を決める。（出席番号順。各グループ2～3名）

2限目 各グループB5一枚に内容のまとめをする

3限目～（10から13）限目

各グループが発表する。

（1時間に2～3グループ）

各グループのまとめは印刷してクラスごとに配布

各章の冒頭と印象的な場面は朗読

10月 最後に感想文を書く。（全員）

感想文の中から1クラス3～4編を紹介

(2)授業のねらい

① 長編小説として「黒い雨」を読む——小説的構成と独特のユーモアをたえた文体について——昭和20年8月6日の原爆投下から5年後の今、小島村で静かな生活を営む閑間重松一家。「黒い雨」はとりわけ矢須子の病気に影響をおよぼしている。自然に囲まれた生活に、交互に挿入される被爆者の悲惨な姿は、矢須子の運命と二重写しになり、悲劇的な結末を予感させる。

初めて読む生徒は「時間の流れが複雑でよく分からなくて混乱した」「日記が飛び飛びで読むのが辛かった」と抵抗感を持ったようだが、授業の最後の感想では「被爆日記だけを続けて読むのではあまりに悲惨で読めなかったらう」「のんびり釣りをしたり鰻の子が遡上したりしているのを見ていたりして、どうしてこんなことを書いているのかと思ったが、地獄図のような人々の様子と対比させていることに気付いた」と変わる。

全体の構成や細部には文学作品としての文学的虚構がいくつか指摘できる。避難する人々の人間群像が折りなすエピソード（バンドで分かった宿禰兄弟、父親に見捨てられた少年、ざくろに入

れ知恵をした子供等) それらの一つ一つの話が人生の深淵を垣間見せ、考えさせる。

また、作者の独特のユーモアを感じさせる視線は全編を流れるもので、グループによってはそれぞれの箇所に触れる。しかし、なかなか説明しても分からないという生徒も多い。(黒焦げの屍体をキグチコヘイのような妻がつぶやく場面等)

一方、女生徒達の多くに一番かわいそうと感情移入されるのは矢須子である。重松とのいたわりに満ちた心の交流がいやがうえにも矢須子のお尻の腫物と髪の毛が抜けるなどのじわじわした原爆症状の悪化を悲劇的なものにする。

- ② 原爆の広島の実相を記録する「ことば」の力の理解——「被爆日記」の清書という行為が普遍的意味(矢須子の縁談のためだけでなく、生きることにつながる)を後世に持つこと——

筑摩書房の「国語Ⅰ」の単元9小説(2)では、第三章の日記部分が採られている。(原爆投下直後、閑間重松は横川駅で被爆し山陽線の線路をたどって広島駅方面に避難する途中、多くの被爆者とムクリコクリの雲を見る。重松は何千人何万人とも知れない人々の風姿様相を書きとめた)

教科書だけを読んだ後で感想文を書く「原爆は悲惨」「戦争反対」と生徒達は観念的な感想をすぐにまとめる。テーマ学習を一步もでない。そうではなく、困難な戦争状況の中で善意に満ちた平凡な人が冷静に物を見、考え、行動し、それを記録したことが大切なのである。重松を始めシゲ子、矢須子などの登場人物がそれぞれの生きかたのなかで無言で、また、さりげなく、そして時に声高に、強い反戦の意志を訴えている。

“黒い雨”にうたれただけで縁談がなく原爆病に蝕まれる矢須子の忍苦と不安な日常生活を「たんたん」と書いている」「なんとのんびりしているのだろうか」とみえるが、人を感動させたり、深く考えさせたりするものはこのような抑制のきいた筆致であろう。

- ③ 現代の状況を考え、自分の意見を持つ視点を得る。——戦争体験の風化が言われる今日だからこそ、戦争や核の恐ろしさを直視するきっかけとすること。——

1990年8月に始まり1991年3月に終結した湾岸危機と戦争は世界中の耳目を中東に集めた。そしてテレビからリアルタイムで流される戦争報道についてその功罪が論じられた。ハイテクを駆使した戦闘シーンを、数千発の爆弾の投下の様子を、食卓を囲みながら家族が7時のニュースで、また衛星放送で見る。それはまるでテレビゲームのよ

うで現実感がない。「ハイテク戦争はカッコいい」「情報戦争だよ」「毎日、戦争の同じニュースでは飽きるよ」生徒のこのような反応は当然である。

戦争を知らない中・高校生が、テレビを通して現代のハイテク戦争の表面のみを見えるということはどういう意味を持つのか。

戦後45年、戦争体験は風化したといわれる。しかし、私は次のような生徒達との経験を思い出す。

86年度高校一年生が「黒い雨」の学習を10月に終え、三学期に高2の研究旅行のコースをきめようとした時、すでに大久野島に泊り広島での原爆資料館の見学、講演は決まっていたが「広島で原爆の話の聞いたり、資料館を見たりするのをやめたい。夜の食事が食べられないから」「『黒い雨』の矢須子さんを思い出すとかわいそうでとても行けない」と旅行委員を始め広島に二の足を踏んだ。「現在の広島は焼け跡ではないし、原爆がどんなものかを直視することはたいせつなことだ。原爆は各地につくられているのだし」というやりとりがあり、生徒達は旅行後の研究集録では広島特集をまとめた。

また、90年度「沖縄研究旅行」を終えた高校二年生は「死者は帰ってこない。調べても調べてもとどまることのない真実に徒労感を味わう。過去の戦争について知ることより、未来の世界の平和について考えたほうがよい。と思ったが、沖縄に来て、上原さん(ひめゆり学徒)の戦争体験談を聞いて、自分の甘さを知った。平和を望むならあらゆる角度から戦争を理解しなければならないことを。“過去を忘れるものは、もう一度それを繰り返す運命にある”と四日間の旅行で、平和についての自分の考え方を見つめ直した。

ハイテク戦争と地球社会に生きる、過去の戦争を知らない今日の高中生が、改めて戦争とは何かということ、具体的に生活のレベルで知ることを「黒い雨」は可能にする。

(3) 各グループの発表について

各グループB5一枚のまとめを配布しても、朗読で時間を取られたりして、20章の発表には時間がかかる。そのことが短縮できるとよいと思われる。

しかし、他のグループの発表で、他の人がどう読み感じているかを聞いて、また別の視点で違う感想を持ったり、わからない言葉や行事や習慣については質問をして当時の生活を知ることができた。発表グループによってはイラストいりのまとめを工夫したりした。

各グループの発表の内容については資料1～2を参照。

(4) 読后感想文から

高1B 島山

私は今まで、原爆の恐ろしさについてテレビや本等で知っているつもりでした。しかし、被爆者の一人一人の気持ちを考えることまでは至らなかった様な気がします。

原爆が落とされたその一瞬に広島だけでなく日本全体の運命も変えられてしまったのです。何の罪のない人々を悲しみの中でつき落としました。

この話を読んで、私は、そんな被爆者達の気持ちが少しでも分かったような気がします。分からなかったとしても、分かってあげようという気持ちが生まれたのは確かです。

岩竹さんの様に奇跡的に命拾いをした人もいたけれど、果たして、生きていた方が幸せだとその時岩竹さんは思ったのでしょうか。生死の境で苦しんでいる時、本当に「生きてて良かった」思ったのでしょうか。私だったらきっと「死んだほうがまし」と思ったでしょう。

私は、この話を読んで、生きるという喜びについて深く考えさせられました。

高1B 清水

昭和の女性はおくゆかしい。私の母は気取ってきれいな言葉を使うと思ったことがある。けど母の姉たちのもの腰とかも大変きれいだ。矢須子やシゲ子さんの言葉も、習慣というか、自然に発声したりしている。川で洗濯する所とか、日記の会話部分とか、私にぜんぜんないものが表れていて何か、気落ちするみたいな感じを受けた。

言葉とかもの腰とかは人がつくるものだ。昭和に生まれた人なんだ。

「広島にて戦時下に於ける食生活」からも、食物を口にして消化して、また口にして、普通の一般の凡人なんだ。と、つらいぐらいに伝わってくる。結婚もするし、悪口だっていう、恥ずかしいと思ったりもする。先祖がいて、子供ができなかったから、養女と暮らしている。八月を暑いと感じて五日の夜、食事をしてくつろいで、眠りについて、いつもと同じように、六日の朝を迎えて。

重松が遭った可能性を私も持っている。いつ人体実験のエリートになっても不思議じゃない。久三の様なフットボールになっても不思議じゃない。

高1C 後藤

この本を読んで一番最初に、この重松という人はよく日記を書いていたなど、思いました。戦争の中で、書き続けていたことはすばらしい事だと思いました。逆に、戦争だから書いていたのかもしれないという気がします。

「黒い雨」の中で、一番印象に残っているのは、八

章の父親が自分だけ逃げてしまった少年の話です。なにか、うまくいえないけれど、戦争の怖さが、人が焼け焦げてしまったとか顔がわからなくなったとか、そんなことより、もっともっと、よく表れていると思いました。人間の弱さがひしひしと伝わってきました。みんなひどいと感じたり思ったりしたみたいですが、そう思っている人達も、実際に戦争というものが起きたらどうなるか分からないと思いました。

これと対照的だったのが七章の「三才ぐらいの女児が、死体のワンピースの胸を開いて乳房をいじっている。……」母親は子供をかばって、自分が死んでいったんだと思います。また、残された子供もちゃんと自分の母を感じているのだと思いました。

いままでと何か違った戦争の怖さの一面を見ることができたと思います。

高1A 谷口

僕は十三章を発表しました。僕はそこに生きている人々がかわいそうになりました。とくに女学生たちが「動員学徒の歌」を歌いながら行進して製鋼所へ行く所は感動しました。また、牛缶を食べるところは、本当においしそうに書いてあったので僕も食べたくなってきました。しかし、蠅がよってくるころは気持ち悪かったです。後は気持ちが悪く、むごいことがいっぱい書いてあり、読んでるだけで嫌になってきました。しかし、そんな中にも人が生きて頑張っているということはせめてもの救いでした。こんな世の中に絶対してはいけないし、このような話も忘れてはいけないと思う。こころのどこかにこの話を知っている人がいっぱいいれば平和な世界になると思う。

高1C 平松

この本を読んで、今まで目をそむけてきた事実が自分の中に飛び込んできた気がした。原爆はホラーなんかよりずっと恐ろしい。なぜなら事実だからだ。自分は原爆を経験していない。小一の時、近所の教育センターで原爆の展示をしていた。その時とてもショックだった。あの時見たものは今でもおぼろげながら覚えている。あの頃よりは冷静に読めたが、あらためて原爆はもう二度と使ってほしくないと思った。また、あんな戦争が起こったらどうなるのだろう。親や子を亡くした人があふれ、町中に人々のうめき声がこだまするだろう。「黒い雨」の中の人々のように。

この小説を読んで、感じたことより考えさせられた事のほうが私は大きい。他のみんなも私のように考えてくれればうれしいと思う。

高1C 田中

戦争の怖さは知っている。もうこんなことを繰り返してはいけないことも知っている。この本はただの記録にすぎないのだろうか。これは、あくまでも文学小

説である。ただ、「戦争反対」と唱えるだけでは、この本を読んだ意味がないと思う。白い虹のことや、ほんの少ししかでてこないような人物に、すごく大きな意味があるのではと思う。

まず、思いうかぶのは「はだしのゲン」である。

「黒い雨」との違いは、大人と小供の視点の違いだと思う。子供の目から見た戦争、大人目から見た戦争、どちらにしてもおそろしいのは同じだと思う。ただ、細かく見る部分が異なっているような気がする。白い虹、鯉、鱒など子供には関係ない物に見えるだろう。

私が「黒い雨」を読んで一番心に残ったのは、この白い虹のことだ。悪いことの起こる前兆だといわれている。太陽の真ん中を横に貫いていたそうだ。こんなものは見たことがない。見たい気もするけれど、不吉ならやっぱり見たくはない。

叶わぬことと思っても、虹に願かけをする重松のころを痛々しく感じた。

3 おわりに

授業の中心は新潮文庫で「黒い雨」を「読むこと」であり、自分が読んだものを「発表」することであった。「黒い雨」は活字が小さくて読みにくく、中身が戦争物となると大部分の生徒が「途中で嫌になってしまふからです。実際夏休みにざっと目を通すだけで何日もかかり、これを授業でやるのかと思うとうんざりしました。しかし、発表授業だったのですくわれました。戦争についてのいろいろな面を考えさせられました」と感想をもらす。中には、授業終了後、「夏休みにはビデオを見て感想文を書きました。授業は飛び飛びでしか読まなかったもので、もう一度しっかり読んでみます」というものもいた。

86年度の高校一年生は矢須子の原爆の症状や被爆者の幽鬼のように歩く場面や戦争の悲惨さや放射能の怖さについてよく発表した。「被爆日記」の方に重点が置かれた発表といえよう。その反省で、90年度高校一年生ではそればかりでなく、自分の読んで見つけた当時の生活と人々の感情について、どんなちょっとしたことでもいいから発表するとよいと指導した。いろいろな視点からの幅のある読解を試みたのである。

国語科の年間計画の中で7月から始まり9月いっぱい10月にかかる「黒い雨」の指導は、高校二年生の「ころ」へ続くものである。ふたつの作品を比較してみると相違点は多いが、長編小説を読んで登場人物

の生活、心理、時代背景を読解するという点は共通しているといえる。また、明治時代の言葉が使われている「ころ」ほどではないが、昭和20年代の「黒い雨」にも現代の高校生では読めない、分からない、言葉や行事や習慣や風習等が出てきた。現代の生活ではすっかり消えてしまったものも多い。生徒には新しい発見であったし、少し前の日本人が持っていた伝統の良さを気づかせるものであった。

一人一人の多様な読みと現在の社会状況への確かな視点を持ちうる教材として「黒い雨」はぜひ高校一年生に指導したい平和教育の入門教材の一つであるといえよう。

さて、「黒い雨」の今後の取り扱いかたには二つの方向があろう。

一つは、次のように表現学習として、「黒い雨」の一部を教材化する方法である。三省堂の「国語Ⅰ」三訂版では「黒い雨」を単元九「状況への発言」で聞き書きの導入教材としている。「原爆に夫を奪われて——広島農婦たちの証言——」は小説「黒い雨」の素材とでも言うべきもので表現学習を目的としている。また、「黒い雨」は三省堂「国語Ⅱ」の単元八「戦争と文学」につながる。田辺聖子の「私の戦争まで」とフィリピンでの加害者としての日本人を取り上げた大岡昇平の「野火」の二編が採られ、戦争で「黒い雨」と関連している。

二つ目は、本校の高2「沖縄研究旅行」の平和学習に関連させる方向である。

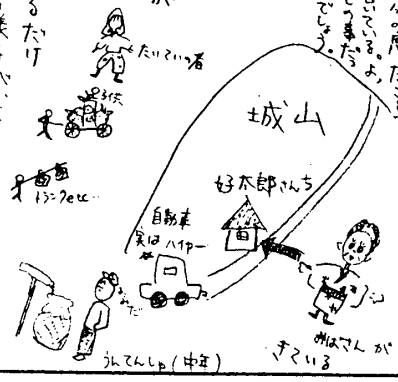
ひめゆり学徒の上原さんはその戦争体験談の中で「沖縄戦がもっと早く終わってれば広島・長崎の原爆投下はなかったのではないかと話された。加害者でもあった日本軍の戦跡を回り、また広大な米軍基地とその極東における働きを目にすると、「黒い雨」の世界が相対化される。よくも悪くも「黒い雨」は日本的（伝統的）なものを多く持っている。「沖縄から日本を見ると日本がよく見える」といわれるが、文学においても同様なことがいえるのではないかと思える。

例えば、チビチリガマの集団自決と「黒い雨」の「キグチコヘイのような」の場面との比較は、黙々と戦争に協力しながらその犠牲になる人々をクローズアップする。

今後も、長編小説「黒い雨」を高校一年生の文学教材の中心として、また平和教育の一環として本校の学校行事と関わらせて指導していきたい。

資料1

黒	い	雨(5) 章	発表者	かとうゆみさんと 足尾 綾子
(1) 語句	聞きあわせ 「雨」の上 スプーン ペナムケリ	慢(い)がさ 命(いのち)豆(まめ) 行(い)き装(ま)い 上(う)り框(かま)	練兵場 支(し)店(てん) 隣(りん)組(ぐみ)	
(2) あらすじ	山形村の婦人が、好太郎の家へ夫須子(むすこ)の聞きあわせに来た。それを知らぬ間は、一日も早く「被爆日記」を清算し、夫方へそれを知らせねばならぬと決意する。そして飯は、あの日のことを一つ、書きつづけるのだ。百二十円は、決まりと思つた俵水がはしめたこと、人であふれた家車、長靴の男、官地と三毛猫に出会ふこと……。			
(3) 印象的な場面 (80) 頁 () 頁 抜き書き	理由は ……百二十円だともいふと思つた、 「いいとすえ、思つたしでない所が、 すく胸にクツクツと。」 文章、ほとんどが同 様の様子である。に 自分の思つたことと まよっている。よ ほどうも、た たうでしよ。			
(4) 構成からみた (5) 章の位置	好太郎の家におお秋を 持ていったところ、山形村のおば さんが結婚の聞きあわせにうていた。			
(5) 文体、表現等の特徴について	……た、が、多く、文、一つ、つ、が、短、い、感、想、心、が 少なく、事、実、目、に、見、え、る、物、を、描、き、が、多、い。			
(6) 感想	ただ、見えてくる物と、単純に書いているだけ なのに、その場その場、彼、を、待、つ、ま、の、り、の、様、子、が、よ、く 伝、わ、る、こ、と、が、感、心、だ、と、思、つ、た、こ、と、を、書、か、な、く、も、心、と、し、ん、ま、つ、は、伝、わ、る、ん、だ、と、思、つ、た。			



資料2

黒	い	雨(18) 章	発表者	宇井 寛弘
(1) 語句	軍袴 (P246) 行李 (P251)	鞭 (P244) 端 (P213) 倪 (P249) 雑 (P270) 駢 (P270) 元兜 (P271)		
(2) あらすじ	戸坂国民学校に收容された山岩竹氏、か庄原の陸軍病院分院に移送された際の山岩竹氏の手記。手記には、被爆した人々の悲惨な状況が書いてある。			
(3) 印象的な場面 (281) 頁 (283) 頁 抜き書き	理由は ……P282とに、く、凄、い、理、解、だ、つ、た、ら、し、く、つ、て、 手、首、の、と、ろ、の、皮、膚、な、し、か、へ、ろ、つ、割、け、ま、 し、た。 ……P285主人の場合は膀胱の内側の膀胱 が、す、かり、割、け、て、その、粘、液、が、尿道、か、と、こ か、に、詰、ま、り、お、し、り、こ、が、出、な、く、な、り、ま、し、た。			
(4) 構成からみた (18) 章の位置	被爆者の悲惨な状況を被爆者の手記を通じて、 生々しく表現して、原爆の悲惨さを読者に訴えている。			
(5) 文体、表現等の特徴について	被爆直後の山岩竹氏の手記、周りの悲惨な状況を冷静に、淡々と書いた手記で、冷静な文体と、悲惨な内容で、読者に強い印象がのこる。			
(6) 感想	原爆といふものか、悲惨な物だということだけか、印象たのこつた。			